ミュンヘン滞在記

平山　淳*

昨年10月より1年間，ミュンヘンにある「マックスプランク物理学及び天体物理学研究所」で仕事をする機会を得たので思いつくままにその印象を記したい．この研究所は西ドイツ各地に点在する約50のマックスプランク協会の研究所の1つで，天文関係はこととボンの電波天文，ハイデルベルグの新しい天文学研究所の3カ所がある．またこの研究所から分れて行ったものにミュンヘン郊外のプラズマ研究所がある．マックスプランク協会全体で約600億円（1974年）程予算があり，そのうち5％程度を天文で使っているようであるが，私の滞在していたところは殆んど使っていないに等しいだろう．この研究所は更に3つの研究所に分れており物理・天体物理・宇宙空間物理とあるが私はそのうちの天体物理研究所にいたわけである．物理は素粒子と原子核が主でハイゼンベルグ先生は近くの自宅から歩いて今でも毎日来ておられるようであった．天体物理という名の下にかなり広い分野の人がおり，原子分子の理論屋・固体論をやる人・数学者・プラズマ屋更にはドイツで最初に電子計算機を設計したというビリング教授も入っている．

無論我々の普通考える「天体物理」を専攻する人が一番多く，内部構造（マイヤー夫人・トーマス・ベルナー・兼任だったキッペンハーン），太陽・彗星等（シュミット・マイヤー・アンツアー・リュスト夫人・エンドラー），それに重力と相対論がエーラースの下に一大勢力を形成している．話にきくとビアマン氏は自分に興味のある問題に必要な物理屋を集めて来たのでこのように多彩な分野の人がいるのだということだった．しかし話を更にさかのぼると，研究所がまだゲッチンゲンにあった頃ハイゼンベルグが彼自身興味をもっていた天体物理の人達を集めたのがはじまりらしい．1950年代の後半は，ビヤマン・シュリューター・リュスト等が天体物理やプラズマ・電磁流体などで華やかに仕事をしていた最盛期ともいうべき時代で，今やリュストはマックスプランク協会会長という大役，シュリューターもプラズマ研究所長をやったりして全く時代が変ってしまっている．三番目の宇宙空間物理研究所だけはミュンヘン市から10 km程離れたガルヒングにあり，ピンカウ氏が中心となって宇宙線・赤外領域の観測などを活発にやっている．

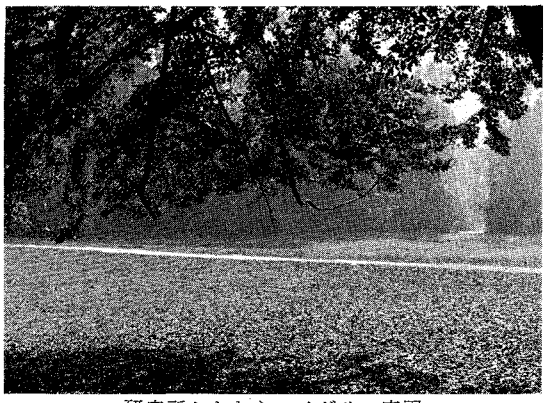
ビアマン氏が停年でやめるので新しい所長を選んでいる時期に私は出くわしたのであるが，候補者として選ばれたキッペンハーン氏が職員を全部掃除のおばさんまで集めて所信を述べたことがあった．その中で，といっても私のドイツ語ではそれくらいしか分らなかったのであるが，ヨーロピアンジャーナル（天文学及び天体物理学）に出ないような研究は「天体物理」とはいわないといって，先に述べた広汎な分野を含めるビアマン方式とは異る方式をとる積りを示していた．しばらくしてキッペンハーン氏は所長になることを受諾したことが伝わって来たのだが，それと共に若い人が何人か外へ移り，その代りゲッチンゲンから氏が数人つれて来るという話を聞いた．中には外の就職口が見付からず意に反して研究的でない仕事についた人もいた．アメリカ程厳しくはないが，やはり天文に関する限り若い人達が安定した職を得るまでは中々大変なようである．

マックスプランク物理学及び天体物理学研究所

職員全部が集まる機会は他にもあって，研究者の一人がその方面のレビューを年に一回程度やるのだが，エーラース教授が重力の理論についてやさしく解説したことがあった．帰りのバスでゼロックスなどをやってくれる研究所のおばさんに「今日の話は分りましたか」と聞いたところ肩をすくめてとてもとてもという表情をした．ドイツでは日本より下からの発言を重んじる面があるのだが，ミット・ベシュティムンクと呼ばれている労働者の経営参加をはじめ，所長クラス以外にも若手の研究者が選ばれてマックスプランク協会全体の評議会のようなゼナートの一員として出席評議できるようになっている．

研究所の生活はどうかというと，重力波の実験以外は理論ばかりで説明することもないのであるが，夕方4時半になるとお茶が出るのでそれが楽しみだった．小さなコロキウムをする部屋で紅茶をすすりながらだべるのだ

* 東京天文台



研究所かたわらのイギリス庭園

が，きまって式を黒板に書いて議論しているのが相対論・重力理論のグループで，シュミット・トーマスなどのグループはもっぱらヨットの修理の話に目を輝かせているといった具合である．大多数は5時から5時半には引きあげてそのまま帰ってしまうのだが相対論屋の若手は更に残って勉強しているようだった．八月に入るとさしもの相対論屋もすっかり休暇でいなくなり，出て来ているのはすいた時に計算機（IBM 360/91）を使おうという帰国期限のせまった外人部隊ばかりになってしまった．唯一のドイツ人は，私と一緒に太陽フレアのモデル計算をしていたエンドラー君でかわいそうなくらいだった．計算機本体はガルヒングのプラズマ研究所にあり，我々は8台くらいある端末機の前に座ってプログラムを変えたり，計算を実行させたりするのである．これは大変便利で良かったが，こちらには出力のプリンターが一台あるだけなので，たくさん結果をプリントさせていると皆から嫌がられるはめになった．そこで自分の部屋が近いのを幸い，ドアを少し開けておくとラインプリンターの音が聞える．慣れるとどのような音の調子が我々の計算であるかが分るようになったので，計算が終った音を聞いてサッと部厚い結果を取って逃げ帰るということをやっていた．

夏のはじめだったかにビアマン先生がイギリスの王立天文学会のゴールドメダルを受けられたお祝いの会があった．大先生達が続々と到着し，中でもリュスト氏は運転手つきの黒塗りのベンツで乗り付けるといった具合で一同講堂で待つ中をビアマン夫妻が現われ，シャンパンがぬかれ挨拶の中でシュリューター・キッペンハーン等々の名前を挙げてこれらの人々の協力でここまでやって来たというような話があった．次いで一人ずつ進みでて握手してお祝いの言葉を述べたのであるが，夫人はメダルを手にして「もってごらんなさい」などといって喜んでおられる様子だった．近くのシュタルンベルク湖畔に住むワイゼッカー氏，滞在中のメステル氏などもいて盛会だったが，最後に夫妻が手をつないで会場から出られたのが印象的であった．

さて，この研究所は宏大なイギリス庭園に続いた森のふちにあって，森の中にはイザール川から分れた小さい川に満々とした水がうねっている．研究所の食堂でソーセージやらカルットフェル・クヌードルやらをたらふく食べた後，その森の中を一人よく散策し疲れては小径のわきのベンチに休んで，時々通る乳母車を引いたこれ以上横に太れないというところまで太ったおばあさんや，謹厳で胸をピンとはった老夫婦などを眺めて昼休みを過した．森の切れ目には芝生がきれいに刈り込んであって，その緑の美しさはたとえようもない．日本ではドイツの自然が美しいということはあまり聞かないのだが，この森をはじめとして南ドイツというか，バイエルン全体というか，チロルやザルツブルグ地方を含めての話だが，全体が公園のように整然としていて絵のように美しいのに全く魅せられてしまった．ミュンヘンの南にいくつもある湖，加えて玉ねぎ型や尖塔型の教会，農家の壁に画いてある物語絵，バイエルン国王ルードイッヒ二世の建てたロコロ式のけんらんたる城，どれをとっても印象深いものである．その湖の一つで遊んだときのことを森鷗外は日記に「此より先き湖上の光景を看るに，水天一碧，時に丘陵の眼界を遮るあり．近岸の処は流光水に漾ひ一幅の書図の如くなり」と記している．しかし難をいうと農家の家々がみんな新しくきれいすぎることで，それはブレンナー峠を車を駆って一気に南下すれば，イタリアの汚い古い家並がずっと人臭く親しみのあるものにみえるので良い中和剤となった．逆に北イタリアではスペイン程でないにしてもそれに似た乾いた空気に包まれている気がするので，週末の夕方などイタリアの高速道路にぎっしりつまって並んだドイツの車と共にインスブルックを通ってミュンヘンに帰ると緑の木の葉がしっとりとした潤いをもっているように感じられるのであった．

南ドイツの風物とならんで堪能したものにオペラがある．人口百万のミュンヘンに3カ所オペラ劇場があり，そのうち2つは盛夏を除いては毎日開演してほぼ満員になっているのだから驚く．歌手の質は特級とはいえないのであるが，出しものによってはアンサンブルが良く楽しめるので，せっせと通いつめたのであった．研究所の事務の人や，ツェッペリン伯の孫だというやはり研究所の工場で働いている人に劇場であったりするのも面白く，服装といえば一・二階の特等席は社交も兼ねたお年寄りなどが盛装して威儀を正しているのに対し，天井桟敷ではヒッピースタイルの若者達が陣どるといった具合である．彼等は歌手がヘマをやると，それが一流のゲストであっても容赦せずブーブー鳴らすのである．オペラが終って外へ出ると雪がしんしんと降っていて，みな外とうの襟を立て音もなく立ち去って行くというのも味わいのある情景であった．